真の父母性から見た同一実体: 神相の相似性を通した弁証

ユン・イエスン

国際 PWPA 企画部長

I. 序論

三位一体の‘同一実体(homoousia)’を‘神性’と見なすことは整合的なのか? 神性たる同一実体は三位一体の正体性(アイデンティティ)を‘神’と規定する。しかし神とイエスの一体性を表わすという同一実体の成立背景、すなわち神人一体問題に遡って三位一体を神であると結論することが果たして妥当だということができるだろうか?

ニケア・カルケドン公議会で定義されたことによれば、イエス・キリストは属性の交流(communicatio idiomatum)により神性と人性の二つの本性を聖子の一つの位格内に持った存在だ。[1] ここで正統教理は徹底して聖子の神性は聖父との同一本質として、人性は人間との同一本質として区分する。従って聖子を神であると照明する時、彼の人性はかけ離れた要素に転落し、聖子の位格に対して人性は連係の蓋然性を失うことになる。[2]

三位一体のある位格たる聖子の二つの本性が絶対的に区分されるという事実は聖子の正体性(アイデンティティ)の問題を越えて、三位一体の神の存在と交流の不可避な区分につながる。[3] 聖子において神的同一実体は神性に起因するのであるが、その使役は人性はやはり包含するしかないという点でそうである。[4] 古典神学の主張のように、三位一体の同一実体を超越的‘神性’と規定する場合、神とイエスの神人一体を究明するために展開された同一実体が、逆に超越神と偶然的被造世界の徹底した分離を招来する。現代の三位一体論の課題たる三位一体と経綸的三位一体の均衡と調和は根本的に神性と人性がどのように均衡と調和を成すのかに対する答えを要求する。

統一神学は神人一体を神の創造目的を中心として説明する。心情を動機として神の形状たる原相に従って、愛的人間(homo amans)を創造し(創世記 1:27)、愛の理想を完成した人間は神に完全に似て、神と一体を成すようになる。神人一体は潜在的なものではなく、神の 95%の責任分担と人間の5%の責任分担がすべて完遂された時の結果だ。イエスのように完成した人間が得る‘神性’の場合も、古典神学のように‘潜在性’を持った神性ではなく後天的なものである。『原理講論』は人間が神の心情を体恤し、そのみ心を知って生活する時、神と一体 (ヨハネ 14:20) を成して、神の‘神性’を持つようになるとする。[5] 統一神学では聖子の神性を創造目的成就の結果と見るために、同一実体を神性の同一性と見なしても三位が存在的に神であるという意味ではない。バーシルが同一実体を同一価値(?μ?τ ι μ ο?)の意味として受け入れたように、[6] 神性の同一性は神としての存在的同一性ではなく、神の価値との同一性であるといえる。

> 完成した人間は創造目的から見れば、神の完全さと同じように完全で (マタイ 5:48) 神と同じ神性を持った価値的な存在なのである。[7]

ここで神人一体は人間たるイエスが個性体として完成して‘神性’を得ることだけを意味するのではなく、神が完成したイエスの‘体’を着ながら‘人性’を持つことまでも包含する。[8] 古典神学で神人一体が‘神性’を根

拠として、現代神学では秘儀的教理に対抗して‘人性’を根拠とした多様な意見を表出するとすれば、統一神学では愛の中で相対関係を結んだ存在と同和するという原則の下で、[9] 神人一体は‘神性’と‘人性’をすべて内包した‘神人愛一体’である。

このような神人愛一体は愛の理想成就という創造目的に依拠することによって、神人一体が神とイエスだけの一体ではなく、神-男-女の三位一体であることを示唆する。 統一神学で神は二性性相の中和的統一体たる天の父母であり、神の実体的展開は男と女であるので必ず男性と女性が夫婦を成して神と一体を成さなければならない。統一神学は完成した神-男-女の三位一体を‘天地人真の父母’と告白する。

そうだとすれば、統一神学的に三位一体の同一実体をどのように理解するべきか?カルデドン公議会では三位の神性を公認して三位一体論を本格化した。統一神学の観点でもやはり聖父-聖子-聖霊で代弁される神-真の父-真の母の共通本質として‘神性’に言及する。[10] 人性がすべての人間が持っている本性であるとすれば、神性は三位一体を成した真の父母だけが持つ固有な本性であるためである。しかし神性だけを同一実体と規定するならば、三位一体の本質をピョンパ的に理解することになる。

聖子と聖霊の立場を考慮すれば、これらが神性を得るまでの過程で人性が土台になって、真の父母として完成した段階で神性を持つことになったとしても人性が消えるものではない。神の立場で考えるならば、神性を持って天地人真の父母になられ、人性も持つ。このように実体三位一体が神性と人性を共通本質としてすべて持っている故に、神性だけに言及して人性を無視するのは望ましくない。人性がなければ三位一体の経綸が空中楼閣の立場に立つという点でも人性は重要だ。それでもイエスの例のように三位一体が‘二つの本性’を持つと規定するのは正しくない。本性は存在の総括概念を指し示す。両性論で三位一体を説明するならば、三位一体に関する存在論的混乱と誤解を呼び入れ、二つの本性教理が招来した色々な困難を踏襲する結果をもたらす可能性がある。[11]

従って筆者は代案として三位の同一実体を‘真の父母性（True Parents’ nature)’と命名しようと思う。真の父母性は神性と人性を包括しながらも、同時に神と聖子、聖霊が三位一体を成して成就した天地人真の父母という存在的意味と関係的意味を同時に生かすことができる。神人愛一体の天地人真の父母は真の父母性という共通本質を持って真の父母としての経綸を行うという論理である。

本論文で筆者は三位一体の同一実体として‘真の父母性’を弁証しようと思う。人間が創造目的を完成して完成実体になる過程を通じて人間の聖子と聖霊が神の聖父と三位一体を成して天地人真の父母になることを扱うのである。完成実体になる条件で同一実体が真の父母性であることを証明しようとする理由は、人間が成長期間の間に責任分担を成就して神と一体を成した存在になるということが窮極的に真の父母を示すためである。[12] 人間が完成実体になるためには神に全て似なければならないという点で原相との相似性に関する考察でもある。本論文では原相の中の‘神相’の相似性’に焦点を合わせて、存在と関係の側面で完成実体を扱いながら、同一実体が真の父母性であることを論じることになるだろう。

II. 神相の相似性で見た同一実体

聖父と同一実体という事実は聖子と聖霊が聖父の格好の神相に似たという意味である。神相に似て、神相的存在の聖子と聖霊は性状・形状の統一体、陽性・陰性の調和体、個性体だ。性状・形状の統一体は一個人の実存に関する内容を意味する。陽性・陰性の調和体は性状と形状の属性として存在構造を意味するが、人間の本性に適用する時は陽性実体としての男性と陰性実体としての女性の調和体の夫婦一体としての実存を意味する。[13] 個性体は人間が神の個別相に似た個性を土台に特有の刺激的な喜びを神に返す最高の価値を持った存在という意味を持つ。[14]

神相的存在として聖子と聖霊は統一体としての神相の存在構造に似た円満な統一体として存在する。統一体としての実存は実体の統一性を適用して理解することができる。ファン・ジンスによれば、実体の統一性には本体論的統一性(ontological unity)と指向的統一性(orientational unification)の二つがある。本体論的統一性は実体の生命が維持する限り、根源的に維持される不可分的統一性として人間で理解しようとするなら、人間の活動や作用における心理作用と生理作用が統一的に併行するということである。指向的統一性は人間が自身の心と体の関係において成す内在的統一性と他者との関係の中での外在的統一性を成長期間に真の愛を中心として成就しながら、神に似た地平を体化して神の聖殿になるのだ。[15] このような統一性を適用すれば、神相的存在は生物的実存の統一体(a united being for biological subsistence)と創造目的完成の統一体(a united being for perfection of the purpose of creation)として存在するという事実を知ることができる。[16] ここでは指向的統一性を適用した創造目的完成の統一体としての聖子と聖霊の存在構造と意味が真の父母であることを考察しようと思う。

1. 性状・形状の統一体

『統一思想要綱』では人間が性状・形状の統一体であるという事実を四つの類型で説明する。第一に、宇宙を総合した実体相、第二に、霊人体と身体の二重的存在、第三に、心と体が統一を成している心身統一体、第四に、生心と肉心の二重心の統一体としての二重心的存在である。そしてこの中で創造目的完成と関連して、生心と肉心の二重心の統一体について重点的に紹介する。[17] 『原理講論』でも述べているように、性状と形状の関係において創造目的と関連して生心と肉心の関係を基本として説明する。

> 生心と肉心との関係は性状と形状との関係と同じで、神を中心として授受作用をして合成一体化すれば、霊人体と身体を合成一体化するようにして創造目的を指向するようにする一つの作用体を成す。これがまさに人間の心である。[18]

生心と肉心の二重心の統一体が性状－形状の統一体の土台になる理由は、先ず、性相と形状の関係が分離できない連続した関係であるためであり、次に一般的に心と体の関係に比べられる人間の性相と形状の関係において心に該当する生心と肉心は身体の霊体と肉体に対し主体の立場に立つためである。このことは霊人体と身体の心の生心と肉心が各々霊人体と肉身を代表することができるという意味でもある。本然の世界では対象が主体に従うのが原則であるために、体は心に従うようになり、心の中で主体と対象の関係が心と体の主体と対象の関係に適用される。従って心の関係を扱う生心と肉心の二重心の統一体が異なる類型の性状・形状の統一体の基本になるのである。

創造目的完成の統一体として生心と肉心の二重心の統一体は神との一体性が心から始まることを現わすという点でも重要だ。神を中心とした生心と肉心の一体が神を中心とした一つの心と体(霊人体内の生心と霊体、肉身内の肉心と肉体)の一体と神を中心とした霊人体と身体の一体につながるためである。生心と肉心の関係において主体に該当する生心は‘神が臨在する’場所である。[20] 性相と形状の連続性を考慮する時、神が生心に臨めば生心と分離できない霊体も神と一体であり、霊人体と分離できない肉身も共に一体を成したことになる。

主体の立場の生心に神が臨在され最終的に人間が神と一体になるということは、性相－形状の統一体としての人間が神の主管を受ける存在であるという意味にもなる。キム・ファンジェによれば、“神は霊人体の構造の中でも性相的部分の生心と相対基準を造成することによって霊人体を主管できる主体の立場に立ち、肉身を主管できる主体の立場に立ち、従って人間を主管できる立場に立つ。”[21]

本然の人間の聖子と聖霊の生心と肉心の二重心的統一体は絶対基準たる善を指向して授受作用した中で合成一体化を成した本然の心たる‘本心’である。[22] 堕落人間の場合は邪心と本心の基準の間で葛藤するが、聖子と聖霊は神を中心としていつも本心の基準に従う。[23] 本心が指向する‘善’は創造目的の完成を意

味するが故に、生心と肉心は創造目的を成すために授受作用して一つとなる。機能的側面では生心は霊人体の成長のために美・真・善・愛の価値生活を追求し、肉心は身体の成長(本能)のために衣・食・住・性の物質的生活を追求するのであるが、生心が主体の立場、肉心が対象の立場で円満な授受作用を通して一つになる。[24]

しかるに、創造目的の完成を指向する生心と肉心の関係において生心と肉心が持つ主体と対象の関係は、統一神学で通用する平等な関係ではない点に注目しなければならない。『統一思想要綱』は生心と肉心の主体と対象の関係を次のように説明する。

> 生心と肉心は本来、主体と対象の関係にある。ここで生心が主体で肉心が対象だ。霊人体が主体で、肉身が対象であるためだ。そうして肉心が生心に従うのが本来の姿である。生心と肉心が合成一体化したのが人間の心であるが、生心が主体、肉心が対象の関係にある時の人間の心が本心である。肉心が生心に従うということは、価値を追求して実現する生活を一次的であるとし、物質を追求する生活を二次的であるとすることである。言い換えれば、価値の生活が目的であり、儀式主義生活はその目的実現のための手段なのである。それだけでなく、肉心が生心に従い、生心がその機能を良く知るならば、霊人体と肉身は互いに公明である。この状態が人格を完成した状態であり、すなわち本然の人間の姿である。[25]

明らかに、主体に対象が従うのは統一神学の定説だが、一般的に生心と肉心の関係のように、主体(生心)の追求が一次的であり、対象(肉心)の追求は二次的なことであるという表現はしない。主体と対象に同じ価値を付与するために、このように明白な差を付ける場合は珍しい。生心と肉心の関係は大部分の主体と対象の関係とは異なって、位階的秩序で派生した垂直的関係であり、創造目的完成の脈絡を考慮してこそ理解することができる。

今まで生心と肉心を性相と形状の統一体として説明したが、心と体の次元で見れば生心と肉心はすべて性相の領域に属する。そして‘存在者においての性相と形状の階層的構造’によれば、肉心は動物も持っている本能としての心であるとすれば、生心は人間だけの独占的領域たる霊人体の心として一次元高いところに位置する。階層的構造は神の創造的秩序に基づいたことなので、本心内部において上位階層たる生心に対する肉心の従属は必然的である。

このような生心と肉心の従属関係は霊人体と肉身の従属関係を含むが、これは霊人体の完成が性相・形状の統一体としての人間の最終目的であるためだ。創造目的完成のために性相・形状の統一体として人間が指向する神の姿としての完全な相似性は霊人体の完成にかかっている。統一神学は人間の三段階の人生を腹中生活(約 10 ヶ月)、地上生活(約 100 年)、霊界生活(永遠)として表現する。腹中での期間が空気中の地上生活の準備期間であるように、地上での人生は愛で息をする霊界生活の準備期間として神と愛で一つになることを目標にする。霊界では霊人体で永生するから、創造目的完成の統一体としての性相－形状の統一体も究極的には生心と霊体の統一体たる霊人体としての完成を意味する。霊人体の完成のための霊人体と肉身の関係を『原理講論』では次のように表現している。

> 霊人体は肉身を土台としてのみ成長する。従って霊人体と肉身との関係はあたかも実と木との関係と同じである。生心の要求の通りに肉心が呼応して生心が指向する目的について肉身が動くことになれば、肉身は霊人体から生霊要素を受けて善化され、それに従って肉身は良い生力要素を霊人体にまた戻すことができるようになって、霊人体は善のための正常な成長をすることになるのである。[28]

しかるに、上に言及した通り、霊人体は肉身との相対的関係を通してのみ成長するので[29] 成長過程において霊人体はやはり肉身に従属した立場ということができる。創造目的のための存在方式においては霊人体に対して身体が従属的だが、実際の生存のための存在方式においては霊人体が肉身に従属しているのである。霊人体と肉身はそれぞれの理由でお互いに従属し、相互従属性を帯びながら、同時に相互補完性を持つ。従って完成実体は霊人体の完成級たる生霊体を前提とするが、生霊体となる前まで創造目的完成のための核心的な性相－形状の統一体は霊人体と肉身を包括した心と体の統一体たる心身統一体となる。

心身統一体は生心と肉心の合成一体化した心と霊体と身体が合成一体化した体が神の創造目的（人間においては被造目的）を中心として授受作用し、合成一体化したものである。心が無形的－機能的側面を担当し、体が有形的・質料的側面を担当することにより、性相・形状の統一体としての公理を最もよく現わす類型である。[30] 完成実体に向かった人間の性相－形状の統一体としての存在構造はやはり心身統一体として理解することが妥当である。

心身統一体は構造上は神の内的自動的四位基台に該当する。内的自動的四位基台は内的四位基台と自動的四位基台が総合したものであり、存在的には自己の同一性を成しながら、性相と形状が授受作用を通じて統一体を成す四位基台である。これに似て本然の人間たる聖子と聖霊は善を中心に心（考え）と体（行動）が授受作用して統一体を成した存在である。実際の人生の中では自身だけでなく他人との関係の中で思考と行動をするので、内外の関係の中で統一性を成そうとする関係的個体である。[31] 創造目的を完成するための心身統一体は神の心情を体恤して愛を実現しようとするので、心と体の内在的統一性はもちろん他人との関係でも美・真・善・愛の生活を自然に行って外在的統一性を成して生活する。[32]

2. 陽性・陰性の調和体

創造目的完成の統一体としての陽性－陰性の調和体は陽性実体の男性と陰性実体の女性が夫婦一体を成したという意味である。統一神学で聖子は本然の男性であり、聖霊は本然の女性であるから、聖子と聖霊が夫婦として一体を成したのが本然の夫婦の原型になる。『統一思想要綱』は本然の夫婦の重要性を四種類で説明する。第一に、本然の夫婦は各々神の二性性相の中の一性を代表する存在として神の顕現を意味する。第二に、本然の夫婦の結合は神の創造過程の最後の段階として宇宙創造の完了を意味する。第三に、本然の夫婦は各々人類の半分を代表し、夫婦の結合は人類の統一を意味する。第四に、本然の夫婦は各々家庭の半分を代表し、家庭の完成を意味する。この中で神の顕現として夫婦を論じた内容は次の通りである。[33]

> 本然の夫婦は各々神の陽性と陰性の二性性相中の一性を代表する存在だ。従って夫婦の結合は陽性・陰性を持つ神の顕現を意味する。

陽性・陰性の調和体たる本然の夫婦が神の顕現たる理由は、先ず、存在構造の類似として理解することができる。性相・形状の統一体としての本然の人間が原相の二段構造に似た存在の二段構造の中の内的自動的四位基台に似ているとすれば、陽性・陰性の調和体としての夫婦は外的自動的四位基台に似ている。外的四位基台と自動的四位基台が一つに総合した外的自動的四位基台は原相においては万物を創造する直前の状態としての本性相と本形状の外的四位基台が自己同一性を帯びた統一体の状態である。本然の夫婦に適用すれば、性相的実体で陽性実体の男性と形状的実体で陰性実体の女性が各自の内的自動的四位基台を造成しつつ、互いに協力して和合し、外的自動的四位基台たる夫婦一体(合成体)を成した姿である。[34]

原相の二性性相が実体的に一性ずつに各々分立した男と女は神の観点では、半性であるので神の全てを表わすのではない。性相・形状の統一体として本心の通りに生きる人間である個体は、神の心情と一体となった存在として、神の内的な部分だけを表現するので、内的四位基台のみに似た存在であるということができる。愛の完成を追求する神の創造目的の観点で完全に神に似た存在は神の分立した一性が合成一体化した夫婦である。自動的四位基台は‘自己同一性’を内包した存在の四位基台であるので、形状的実体の人間は結婚しなければ不完全で完成できないまま残っていると見なしたユダヤ思想が与える教訓と同じように、神中心の夫婦として一体を成し遂げた時、神に似た自我として完全なものになる。

『原理講論』で提示する人間の完成はやはり神を中心とした一つの心と体だが三位一体を成した個人的四位基台の完成に続き、神を中心とした夫婦で三位一体を成し遂げた家庭的四位基台の完成を説明する。さらに、夫婦となって家庭的四位基台を成した完成実体は万物の主管主の資格を備えたのであるから、[36] 万物との三位一体を成し遂げて主管的四位基台を完成したことでもある。

> 被造物の完成はすなわち神と一体を成して四位基台を作ることを意味するのであるから、人間の個体が完成されようとするなら神を中心として心と体が三位一体を成して四位基台を作らなければならず、夫婦として完成されようとするなら神を中心として男性と女性が三位一体を成して四位基台を作るべきであり、また被造世界が完成されようとするなら神を中心として人間と万物世界が三位一体を成して，四位基台を造成しなければならないのである。[37]

陽性・陰性の調和体としての夫婦が神の顕現たる他の理由は神の完全な体として機能できるという点だ。私たちは先に神が生心に臨在するとしたのであるが、これは人間が‘神を迎える心’を持つという意味だ。迎える心は神が臨在することができるように相対基準を作ることと理解することができる。神が臨在することができる条件は主体と対象が善を中心として一つになることで、主体と対象が一つになったその中心に神が臨在することになる。[39] 従って完成した男女が夫婦を成してこそ神が臨在することができるのであり、夫婦は神の完全な体として機能するようになる。

聖子と聖霊が神を中心と一体を成した夫婦は‘真の父母’である。真の父母が重要なのは、神の形状として完成し、形状的実体を越えて‘実体的実体’として機能するという点だ。神との一体は人間の観点では個人から始まって夫婦になって父母になり、愛を体恤して完成することになるように見える。しかし神の観点で実体的実体として機能できる開始点は、人間が個体として完成した男女が夫婦を成して‘真の父母’になった時から始まる。すなわち、神が臨在して実体を用いられるといわれる時の実体とは真の父母という意味である。

> 夫婦が神を中心に横的に互いに愛すれば、神の縦的な愛がそこに臨むようになり、ここに愛の相乗作用による生命の創造が成されるのである。[40]

> アダムとエバが完成された夫婦として一体を成したその場がまさに愛の主体である神と美の対象である人間が一体化して創造目的を完成した善の中心になる場だ。ここではじめて父母になられた神は子女として完成した人間に臨在し、永遠に安息されるようになる。…ここではじめて神のみ言葉が実体として成されるために、ここがまさに真理の中心になって、すべての人間をして創造目的を指向するように導いてくれる本心の中心にもなるのである。それ故、被造世界はこのように人間が完成して神を中心とした夫婦となることによって成り立つ四位基台を中心として合目的的な球型運動をするようになる。[41]

神の真の愛で自分の相対と一つになろうとする時に、絶対的な神の愛が臨在するのである。[42]

神の完全な実体として機能するということは、すなわち神の体として神が直接愛を体恤することができるようにされる時である。神様の愛は完成した男女が‘真の父母’になった後からである父母の愛から始まる。

神の愛とは何かを調べてみることにしよう。神を中心としてその二性性相の実体対象として完成したアダムとエバが一体を成して子女を繁殖することによって父母の愛(第一対象の愛)、夫婦の愛(第二対象の愛)、子女の愛(第三対象の愛)等、創造本然の三対象の愛を体恤してこそ、三大目的を完成して、四位基台を成した存在として人間創造の目的を完成するようになるのである。[43]

従って愛の理想実現という目的で見る時、神の実体対象としての人間は‘真の父母’になってこそはじめて完全な実体として機能する。言い換えれば、神と一体を成さなかった人あるいは夫婦(父母)は、完成実体ではなく、人格完成者でも夫婦を成し遂げなかったとすれば完全実体ではない。ただ真の父母だけが‘完成実体’であり、‘完全実体’と見なされる。すなわち、人格完成が神の内的心情に似て神の性相的機能とするならば、夫婦一体は外的構造に似たものとして形状的機能をなすものとして、神の本性相と本形状に全て似た真の父母だけが神の内・外的実体として機能することができる。神は真の父母の体を用いて愛の結実たつ愛の理想の完成に向って引き続き愛を追求することになる。[44] 真の父母の存在が原相の自動的四位基台に似たとすれば、このような真の父母の子女繁殖は神の人間創造に似ており、原相の発展的四位基台に似ているのである。[45]

一方、主体と対象の一体は夫婦だけを意味するものではないので、神の臨在について疑わしいこともあり得る。明らかに、主体と対象の関係には心と体、父母と子女、国家と国民などが該当することができるので、これらが善を中心にして一つになれば、神が臨在することができると見ることができる。しかし真の父母が成立する夫婦一体は神の完全な体であり、直接主管の出発点として特異性がある。例えば、主体たる心と対象たる体が一つになった人格的な個人の生心に神が臨在するという表現がある。[46] しかしその個人がまだ夫婦を成し遂げなかったとすれば、生心の臨在にともなう神の主管は間接主管である。『原理講論』は直接主管について、“神を中心として主体と対象が合成一体化して四位基台をなすことによって、神と心情の一体を成して主体の意思のままに愛と美を授受して善の目的を成すこと”と明示する。そして人間に対する神の直接主管の具体的例示として、神を中心としてアダムとエバが完成し合成一体化して家庭的四位基台を造成することによって神と心情の一体”を成し遂げるとし、直接主管が夫婦一体から始まることを見せてくれる。[47]

また生心への臨在は神の主管性を現わすが、この時の主管性は初めから完成級の主管なのではない。生心に神に迎えても、自然に神のみ心を実現しようとするなら、蘇生、長成、完成の成長過程が必ず必要だ。[48] 本然の人間は初めから生心に神を迎えて神と疎通でき、み心を知り、そのみ心に従って生きていくが故に、神の聖殿ということができる。しかし聖殿として定着するまでには三段階過程が必要である。[49] また神が住むことのできる完全な聖殿は‘家庭’であるために、夫婦を成して真の父母にならなければ、神の活動が制限されて神がご自身を完全に表わされないので、家庭を成した後にまた神の聖殿としての三段階の成長過程を経なければならない。従って聖子と聖霊でもやはり蘇生、長成、完成の個人的人格完成の過程を経なければならず、夫婦一体を成して真の父母になった後にも、蘇生、長成、完成の過程を経て真の父母としての完成過程を経なければならない。成長過程が蘇生期、長成期、完成期の三段階であり、各期間ごとに蘇生級、長成級、完成級の過程があるためである。

神の直接主管はただ夫婦一体を成した真の父母から始まることができる。真の父母は神の完全な聖殿として神が直接主管することのできる実体対象である。堕落人間までも神の体たる真の父母を中心に迎えて関係を結んで一つになれば、神の直接主管を受けることができる。神の直接主管圏は真の父母の故に始まり、家庭、社会、国家、世界などに順次広げることができる。[50]

3. 個性体

人間は神の普遍相と個別相に共に似た個性真理体で連体である。このような人間を個性体とすれば、神の個別相を重点に置いて扱う時の個性真理体を意味する。『統一思想要綱』は、個性体としての人間は個人別の個別相を持ちつつ、個性が容貌上、行動上、創作上の三つの特性として現れるとする。[51] 個性体は神に似た容貌や行動、創作で個性美を見せて、神に喜びをあたえる存在だ。父母が自分の表現体たる子女を見て、美しくて愛らしいと感じるように、父母である神は子女たる人間固有の容貌と行動、創作生活が自身に似たことを見ながら、喜びを感じられるようになる。[52]

このような個性体を創造目的完成の統一体として照明すれば、『原理講論』で説明する‘神の喜びのための善の対象’に該当する。『原理講論』は神の喜びのための善の対象が神自体の本性相と本形状を相対的に感じることができる刺激を与えるために喜びを感じさせると説明するのであるが、個性体が神の表現体として神に喜びを与えるという内容に符合する。従って個性体として指向する点は神の喜びのための善の対象の指向する点と同一だと見なすことができる。[53] 神に完全に似た姿になって神に最も大きい喜びを返すためには、本然の個性体の容貌と行動、創作活動に現れる個性美が神の喜びのための善の対象が指向する三大祝福の成就に向かって現れなければならない。

> 被造物がどうなってこそ神が最も喜べるだろうか?神は万物世界を創造された後、最後に自らの性相と形状のとおりに喜怒哀楽の感性を持った人間を創造されて、それを見て楽しもうとされたのだ。それ故、神がアダムとエバを創造されて、生育して繁殖し、万物世界を主管しなさい(創世記 1:28)と言われた三大祝福のみ言葉に従って、人間が神の国すなわち天国を成し遂げて喜ぶ時に、神もそれを見て最も喜ばれることは言うまでもない。[54]

個性体として三大祝福を成就するために個性美を現わす行為は神に喜びを返すことであるが、人間の立場では神から愛を受けることになる。喜びは独自的には生じないので、喜びがあるという言葉は相対と相対基準を作って授受作用が成り立ったという意味だ。[55] 対象が主体に返すものが‘美’であるならば、対象が主体から受けるものは‘愛’という。神は父母として子女たる人間を絶えず愛そうと思われるから、いつも主体として愛を与えるので、対象たる人間が美を返すならば、愛と美の授受作用が続く。従って本然の個性体として個性美を発揮して‘善の対象’になり、神からますます大きくて深い愛を受けるようになる。[56] 神に喜びを返す点を強調した個性体が神の喜びのための善の対象だとしたら、このように神からの愛を受ける唯一無二の子女という点を強調した個性体は‘独生子’と‘独生女’だということができる。[57] 統一神学で独生子と独生女は神の愛を受けることができる真の息子と娘を示すためである。[58] 個性体たる独生子と独生女が愛を受ける基準はやはり三大祝福完成である。

神が独生子・ 独生女を眺めるようになる時、どんな基準があるであろうか？そのようなことをすることができる時が来ることを待ちこがれていたことであろう。そうすることができたとすれば、神はしかたなくそうするであろうか？神がそのように創造されたので、創られた独生子・独生女がそうなるのを見て喜ばれるというのである。… 救援摂理の最高の目的はどこか?世界を全て神のふところに抱くことよりも、それを抱く前に何を抱かなければならないか?神が愛する一つの家庭、本然の神の愛を中心として独生子・独生女の立場で成長し、神を父として侍って差し上げることができる場で祝福の基台を成して、人類の真の先祖の基台を用意しなければならないのである。[59]

独生子・独生女たる聖子と聖霊は本然の個性体であり、神の喜びのための善の対象として神のみ言葉たる三大祝福を成して神に喜びを返すと同時に、神の唯一無二の愛を初めて受ける存在になることができる。本来、最初の独生子と独生女として誕生した存在はアダムとエバであったが、彼らは堕落して、喜びでなく悲しみの存在になり、愛を受けられなくなって、善の対象でも独生子と独生女でもなくなってしまったためである。聖子と聖霊が独生子・独生女としての責任を全うすれば、本然の個性体としての男性と女性の原型になる。堕落人間は本然の独生子・独生女たる聖子と聖霊を迎えて、これらに似た個性体としての生活を送る時、神の喜びのための善の対象になると同時に独生子・独生女として神に愛される真の息子娘になることができる。[60]

神の真の表現体で神の真の息子娘という事実に基づいて、独生子・独生女が神の愛を独占するということは神と一体を成すという事実を意味する。独生子・独生女は神と独特で親密な父子関係を見せる。三代祝福の成就によって緊密になるので、神との心情的一致、神との形状的一致、神との主管性一致ということができるのである。[61]

参考までに、ボス(G. Vos)が整理した独生子・イエスと聖父・神との父子関係の本質の四種類を紹介しようと思う。ボスは神の啓示の絶頂と考えた共観福音書の内容を土台にして、神とイエスを比較して父子関係の本質を類推した。第一に、父と息子には互いについて絶対的相互的知識がある。(マタイ 11:27) 第二に、父と息子は互いに啓示しなければならない相互必要性がある。(マタイ 11:16,19,25,27;16:17; ヨハネ 14:6).第三に、各々が絶対的主宰権を持っているのであるが、父の主宰権は“天地の主宰”(マ 11:25)のみ言葉によって、息子の主宰権は“全てのものを私にくれたので(マタイ 11:27)”という宣言と表現される。第四に、相手方に啓示することにおいてそれぞれが絶対的主権を使用するのであるが、父の主権は“このようになったのが父のみ心”(マ 11:26)として、息子の主権は“息子の願い通りに啓示を受ける者”(マ 11:27)に表れている。[62]

ボスの主張に表れる父子関係は創造目的と喜びについての内容が抜けていて、相互知識が可能な理由と相互啓示の必要性、主宰権と主権がどのように可能なのかを話すことができなかったが、相互啓示を立証して第一祝福と関連した知的一致と[63] 第三祝福と関連した主管性を表現し、独生子としてのイエスが三大祝福のみ言葉と関連するという事実を見せているという点で統一神学の観点と似ている面がある。

一方、神を表現して固有の喜びを返す個性体が独生子と独生女として現れるという事実は、男と女が皆‘神の形状’であり、個性体として完成すれば神の唯一無二の愛を受ける独生子と独生女になるので、同等な価値があって尊いという事実を現わしている。[64]

今までの神学史で女性はパウロの秩序的模型の犠牲の羊だった。アウグスティヌスとアクィナスが確固として確立し、現代になってバルトが再確認した‘創造の秩序’の模型は、魂と頭を象徴する男を上位に、体を象徴する女は下位に配置して女性を抑圧する一助となった。[65] しかし統一神学によれば男と女はすべて神の形状である。聖書でもやはり父なる神の父性と共に、母なる神の母性も象徴化されて表現された。(ホ 11:4;サ 49:15,66:13;詩篇 25:6).[66] イエスの教えもやはり男女平等を訴え、実際イエスの使役も抑圧された女性と疎外

階層の解放として現れた。[67] モルトマンによれば、男女の秩序的模型を支持するいかなるキリスト的根拠も発見できない。神の形状としての男性と女性は決して男の ‘優越性’ でなく、両者の ‘相互性’ だけが実現されなければならない。[68]

統一神学的には、神の二性性相の各々一性が実体化された男性と女性の差異は神にとって刺激となり、喜びを返す価値あるものなのだ。[69] また、さらに、すべての男性と女性が個々人の気質と特性が違う個性体であるという事実は、各自が特有の喜びを差し上げて愛を受ける唯一無二の独生子と独生女になる可能性があることを意味する。『原理講論』の説明のように、“人間の創造本然の価値は横的に見れば、誰でも同等だから、その価値はそれほど貴重なことのようには見なされない。しかし天を中心として縦的に見れば、各個性は最も尊い天宙的な価値を各自が持っているのである。”[70]

III. 結論

統一神学において、三位の同一実体は神人愛一体が成された時に持つことになる属性である。 特に人間の聖子と聖霊の立場で見れば、愛を通した一体は神の心情をすべて体恤して、愛と関連した神性を持ったということは、必然的に心情を根拠とする神性と神相にすべて似る過程を経たということだ。本論文ではこの内で、神相に全て似た存在が真の父母なので、聖子と聖霊が完成した人間として持った神性はやはり真の父母になって持つことになった神性と見ても無謀だという結論を出そうと思う。

筆者は聖子と聖霊だけでなく、神を含んだ三位一体の同一実体を神性の代わりに真の父母性として定礎することが神の創造目的を考慮する時、より合理的と判断する。創造目的の真の愛の完成は主体の完成と対象の完成をすべて意味する。[71] しかるに、神性は両者の愛の完成を明確に表わすことができない。先に、神の立場において、神の存在論的正体性（アイデンティティ）は ‘神’ だが、相対関係を内包する愛の理想を内包したアイデンティティは ‘真の父母’ だ。神性と称する時はやや真の父母としてのアイデンティティが脱落するし、実体対象たる聖子と聖霊の体(人性)を着て、愛の理想を完成したという側面が浮び上がらない。[72] 反面、真の父母性は神が真の父母でおられ、真の父母として完成なさったという事実を表現するのに適合する。

人間の立場でも、完成して ‘真の父母’ になったという点を明確にする真の父母性がより良い。人間が真の父母になったということは神が与えようと思われた三大祝福を全て相続したことを意味し、同時に神の愛の理想を実体的に実現する存在であることを表わす。真の父母性は神性があたえる語感より存在的に神として誤認を受けることができる余地を遮断し、真の父母として完成した人間のアイデンティティを明確にする。創造目的を個別位格の立場でなく、三位一体の実体に適用しても同じである。聖子と聖霊の三位一体のアイデンティティは神でなく ‘真の父母’ だ。従って、三位一体のアイデンティティを生かした同一実体は神性よりは真の父母性だ。

三位一体の同一実体を真の父母性として定礎するのは、内在的三位一体と経綸的三位一体の関係で区分するのを避けて統合を試みる側面もある。真の父母性は三位一体の本質が愛であることを明確に表明して、内在的三位一体と経綸的三位一体の関係を、愛を中心に解きほぐす。愛の理想の側面ではすべての関係は主体と対象の関係として相対関係を結んで統一を指向する。従って、内在的三位一体と経綸的三位一体の関係はやはり主体と対象の関係として授受作用を通じて一体を成すのである。

無形の神が真の愛・真の生命・真の血統の根源であるとすれば、[73] 三位一体の天地人真の父母は真の愛・真の生命・真の血統の実体的先祖である。[74] 子女の立場の人間や世の中は内在的三位一体で子女の聖子と聖霊が父母である神と心情の一体を結んで一つになったように、真の父母を迎えて心情の一体を結べば神との一体につながって、真の父母性を相続することになる。

真の父母性として究明した同一実体は、無形の縦的真の父母たる神と有形の横的真の父母の聖子と聖霊が神人愛一体を成した天地人真の父母の存在として天地人真の父母の経綸を行うという点が明確になる。

注

1. 属性の交流に対する見解はイグナティウスが初めて披歴したと見られる。公式的にはエフェソス公議会で議論されたし，以後カルケドン公議会でイエスの二つの区別される本性が一つの位格で一致を成し遂げていると承認した。

   Ignatius of Antioch, *Letter to Theophorus*, 7; J. N. D. Kelly, *Early Christian Doctrines* (London, New York,: Longmans, 1950), 143.

2. Theodore T. Shymmyo, "Unification Christology: A Fulfillment of Niceno-Chalcedonian Orthodoxy," in ed. Theodore T. Shymmyo and David A. Carlson, *Explorations in Unificationism* (New York: HSA-UWC, 1997), 26.; Jean Hervé, Nicolas, *Sintesi Dogmatica: Dalla Trintà alla Trinità,* vol. 1 (Città del Vaticano: Libreria Ed. Varicana, 1991), 354. James Stevenson and W. H. C. Frend, *Creeds, Councils and Controversies : Documents Illustrating the History of the Church Ad 337-461* (London: SPCK, 1989), 353.;

3. 徹底的に創造主と被造物を区分するキリスト神学で救援の経綸のため唯一の媒介体は神性と人性を同時に所有した'イエス キリスト'だ。救援の経綸では神性に劣らず人性が重要であるために、現代神学で

は神の超越性だけでなく内在性について探求し、イエスの人性に対してより深度深く照明する。

4. ハルナクは、救援のためにイエスが神性と人性を所有しなければならないことを次の通り明　言する。“人間本性の構成とその神化に実際に介入するために、救世主は自ら神であってこ　そ、また人間にならなければならない。この2つの条件が充足する時、実際的で本性的な救　　援、すなわち人間の神話が実際に成り立つ。”ウィリアム・ラルフ,『ロゴス・キリスト論とキリス　ト教神秘主義』, アン・ソグン訳、(ソウル: ヌメン,2009), 95. 再引用。

5. 世界平和統一家庭連合.『原理講論』(ソウル: 成和出版社, 2014), 46, 110-111.

6. プルチェ(B. Pruche)はバーシルが同一価値と同一実体を同意語と感じたと紹介する。Benoit Pruche, “Introduction” to Basil, *De Spiritu Sancto*, in *Sourses Chretinnes* (Paris, 1945), 28.

7. 世界平和統一家庭連合.『原理講論』(ソウル: 成和出版社, 2014), 227.

8. 統一思想研究院.『統一思想要綱 (頭翼思想)』. (ソウル: 成和出版社 1993), 263.

9. 文鮮明,『原理原本』第 1 冊 (プサン: 筆写本, 1951), 22.

10. 文鮮明先生み言葉編纂委員会. 『文鮮明先生み言葉選集』제54권, 1972.03.26.; 世界平和統一家庭連合.『原理講論』, 46.

11. Schleiermacher, Friedrich. *Der Christliche Glaube Nach Den Grundsätzen Der Evangelischen Kirche Im Zusammenhang Dargestellt* (Berlin: Walter de Gruyter, 1960), Ⅱ, 50 .

12. 世界平和統一家庭連合.『原理講論』(ソウル: 成和出版社, 2014), 258, 410.

13. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 236.

14. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 240.

15. ファン・ジンス.『性相・形状の統一の意味に関する再照明』, 3-6.

16. 生物学的実存の統一体と創造目的完成の統一体はチジウルラスがイエス・キリストのフィ　ポスタシスを生物学的実存のフィポスタシスと終末論的(三位一体的)フィポスタシスに区分したことに影響を受けて使った。

ジョン・チジウルラス, 『親交としての存在』, イ・セヒョン・ジョン・エソン訳、(チュンチョン: サムウォン書院, 2012), 57.

17. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 233.

18. 世界平和統一家庭連合.『原理講論』(ソウル: 成和出版社, 2014), 69.

19. 統一神学では性相と形状はいつも統一体として理解されなければならない。例えば、心　　身統一体 (united being of mind and body)とは肉身を用いて生きていく人間の心と体が分　離することなく、連続した統一体であることを意味する。心と体の各々が実体でなくある　　実体の中で機能的要路と有形的要素を担当することを意味する。二重心の統一体(united　being of spirit mind and physical mind)も生心と肉心が連続していることを現わしながら、
結果的に霊人体と肉体が連続していることを現わす。
統一思想研究院,『統一思想要綱』, 233.

20. 世界平和統一家庭連合.『原理講論』(ソウル: 成和出版社, 2014), 66.

21. キム・ハンジェ.『統一教義学研究Ⅲ』. (アサン: 鮮文大学校出版部 2006), 228.

22. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 171.

23. 『原理講論』によれば、善を指向する心は性相的な本心と形状的な良心に区分される。本心は本然の善をいつも指向し、良心は善の基準に関して分別なく善と見なすものを指向する。堕落人間の場合は良心が悪

を善と誤認して邪心の指向性に従ったり、本心と邪心の基準で葛藤を起こすけれども、聖子と聖霊のような本然の人間は本心と良心がいつも本然の善だけを指向することで調和をなす。世界平和統一家庭連合.『原理講論』, 69.

24. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 171, 233-235.

25. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 234.

26. 統一思想研究院.『統一思想要綱』,172.

27. 世界平和統一家庭連合,『原理講論』(ソウル: 成和出版社, 2009), 55-58;
世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 65-68.

28. 世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 66.

29. 統一思想研究院.『統一思想要綱』,172.

30. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 31.

31. 統一思想研究院.『統一思想要綱』,100.

32. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 66-70.

33. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 236-237.

34. 統一思想研究院.『統一思想要綱』,101, 238; "神様の性状的な実体が夫で、形状的な実体は誰か?夫人だ。"『み言葉選集』第 327 巻. 2000.07.30.

35. Paul King Jewett, *Man as Male and Female : A Study in Sexual Relationships from a Theological Point of View* (Grand Rapids: Eerdmans, 1975), 121.

36. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 237.

37. 世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 411.

38. "神を中心として見れば、神、その次にアダムがあります。そのアダムの心が神を包んでいるのですが、これを生心というのです。生心は何かといえば、縦的主体になる神は横的アダムの心の中に臨在なさるので、まさに神に侍る心です。それを生心というのです。"『み言葉選集』第50巻,1971.10.24.

39. 主体と対象が一つになってこそ神が運行しますか？原理的に主体と対象が一つになる時 は必ず中心が生じます。神が臨在するとはこのことです。主体と対象が授受すれば、必ず運動するので、一つの中心点、一つの場で永遠に回ることができる中心点を探すようになります。そのために主体と対象が動くところから球形が生じます。そうなるのですよ。そのために主体と対象が完全に授受しなくては、神の主管を受けることができません。神の相対になることができる条件を設定できなければ、神と関係ないという論理が成立するのです。"『み言葉選集』第 82 巻,1976.01.31.

私たちが神を愛という時、正確には愛の '中心' でおられるという意味だ。従って神はいつも中心の場に位置なされる。"神は愛です。そうだとして、神イコール愛ではありません。神が全知全能だとしても、神イコール全知全能ではありません。たしそれの中心であるというのです。『み言葉選集』第 20 巻, 1968.03.31.

40. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 236.

41.世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 41.

42. 世界平和統一家庭連合,『천성경』(서울: 성화출판사, 2013), 1-2-2-4, 67.

43. 世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 53.

44. "結婚してこそ神の性相・形状が実体形状としてできるというのです。"『み言葉選集』
第323巻,2000.05.28.;

“神のみ心は創造理想を完成することによって成るのです。…神の創造理想の完成、御旨の完成とは何か? 神を中心として、神の愛を中心として四位基台を完成することによって創造理想も完成され、御旨も完成されるということを皆さんは知らなければなりません。”

『み言葉選集』第102巻,174,1978.12.24.

45. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 238.

46. 例えば、次のようなみ言葉が多い。“皆さんの話は神の天倫の法度の代わりになる話にならなければならないし、皆さんの行動はその法度のみ言葉と一つになった行動にならなければなりません。皆さんが原理を通じて知っていることと同じように、み言葉の代わりになる実体が現れれば、そこには神の心が臨在するというのです。そうして神の心が臨在したその個体は永遠の理念を通じることができる方向に動くから、その体と心が実際の生活圏内でお父様の理念の代わりをすることができる生活をするようになるというのです。”『み言葉選集』第3巻,1958.01.12.

47. 世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 61.

48. 3数原則を基盤として、天地が創造されたということを皆さんは知らなければなりません。私　たちは体が…. 気持ちは永生するのです。心の中に神が臨在するようになれば、生心とい　うものがあって、3段階ですね。”『み言葉選集』 第 69 巻,『1974.01.01.

49. 神様の創造目的の四位基台は3段階の過程を経て完成される。ある物体が定着するためには最小限3点で支持されなければならないように、聖殿として機能するのにも3段階が必要だ。世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 57.

50. “臨在地は私たちの家庭だ。真の父母だ。神がこの家庭の上に永遠に臨在することを願わ　れるのを実感するか? 霊界に通じる人は皆先生と関係を結ばなければならない。神は先　生の心の中に、先生の家庭の中におられる.…家庭を天がどれくらい待ちこがれたかという　ことを感じなければならない。ここを基点として各家庭に臨在なされるようにするのが祝福で　ある。”『み言葉選集』第 22 巻,1969.01.21.

51.統一思想研究院.『統一思想要綱』, 240.

52. 統一思想研究院.『統一思想要綱』, 241.

53. 世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 45.

54. 世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 44.

55. 世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 45.

56. 世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 52.

57. “独生子、あるいは新郎新婦、あるいは兄弟になるという言葉は何のことか? 何を中心としていう言葉か? イエスを中心とすることではないよ。神を中心としてする言葉です。この地上に数多くの男たちが来て行ったし、数多くの男たちがいて、これから数多くの男たちが来ることであろうが、神の愛を中心として見る時、その多くの男たちの中で神の愛を第一に受けることができる代表者という話です。”『み言葉選集』第50巻, 1971.11.06.

58. “真の人生の道とは何か? 神を私のお父さんとして侍り、そのお父さんの真の息子娘、すなわち独生子・独生女になることです。独生子・独生女になることが私たちが行かなければならない人生の道というものです。…イエス・キリストは、『私は神の独生子だ。神は私のお父さんだ』と言いました。独生子とは何ですか? 神の初愛を丸ごと受けたという話です。神の独生子はいたのに、独生女はいましたか？ 独生女に会えなかったので、神の初愛を丸ごと受けることができる独生女に会うためにイエス様は再臨するのです。再臨

主がきて何をするか?子羊の婚姻をしなければならないのです。神の初愛を丸ごと受けた男と神の初愛を丸ごと受けた女が家庭を作らなければならないのです。その場はどのような場か? 堕落しなかったアダムとエバの場です。”『み言葉選集』第41巻,1971.02.15.

59.『み言葉選集』第159巻,1969.05.12.

60. “幸福な人というのは神が願う最も尊いものを自分のものとしてなすことができる者をいう。その尊いものは何なのか? 神を父とし、神の独生子を父とし、神の独生女を母とすることができることである。”『み言葉選集』第9巻,1960.05.01.

61. “独生子とは何か? 神の愛を一人占めする人です。本来、神の愛は一体をなすためです。父母と子供の間は愛という因縁で結ばれています。そのためにその愛を負かすことができる父はおらず、その愛を負かすことができる子供はいないのです。愛だけがその二人を支配するから愛を中心として因縁を持ったものは父母のものであり、子供のものであるに違いないのです。こういう意味で 『神がこの世をこのように愛して独生子を下さったのは、私を信じる者が滅びることなく永生を得るようにしようとされるためである。 (ヨハネ3:16)』というみ言葉をくださったのです。”『み言葉選集』第31巻,1970.06.04.

62. Geerhardus Vos, *The Self-Disclosure of Jesus* (New York: George H. Doran company, 1954), 143-149. Robert. L. Reymond,『最新組織神学』, ナ・ヨンファ・ソン・ジュチョル・アン・ミョンジュン・チョ・ヨンチョン共訳 (ソウル: キリスト教文書宣教会, 2004), 299-302.

63. 心情の一致は情・知・意の一致と連関している。

64. 統一神学では創造本然の男女の関係は同等である。“女性は男性の補助や保護の対象ではなく、神のまた他の一性を代表した場でむしろ男性を完全にしてくれる独立した人格者です。真の愛の理想を中心として女性は男性の尊い愛の対象者です。価値的に見て、男女は絶対平等な存在です。本然の真の愛で一つになった男女は互いに同じ地位になる同位権を持つようになります。またどこでも常に共にする参加権を持ちます。さらに、お互いを第二の自分のこととして共有する理想的相続権を得るようになるというのです。このように神の真の愛の理想の下で一つになった男性と女性は、同位・参加権だけでなくお互いのものを自分のものとして共有することによって真の愛を中心として価値的に完全に平等な存在になるように創造されました。従って男性と女性は互いに相対の特性と気質と役割を奪う対立・敵対関係ではありません。真の愛で自分のものを相対に与えて相対側をより一層完成させてやりながら、より大きく一体になることで共有する関係です。”

真の父母様、“アベル女性国連創設大会基調演説”,世界平和統一家庭連合,『平和経』(ソウル: 成和出版社,2013),1001.

65. Karl Barth, *Church Dogmatics,* Ⅲ/2, trans. Geoffrey William Bromiley (Edinburgh: T. & T. Clark, 1977), 441.

66. 旧約を書いた者たちは子女を愛する母として神を象徴化して表現した。神は人々を抱きしめてキスし、涙をふいてくれる母である。レオナルド・ボフ,『聖三位一体共同体』,キム・ヨンソン・キム・オクチュ共訳 (ソウル: クリスチャン・ヘラルド,2011),95.

67. キリスト教的解釈を主張する女性神学者らは聖書の本質を男女平等のメッセージと見た。ルーサー (R.R. Ruether)は予言者的メシア的伝統を主張し、ラッセル(M.Russell)は聖書の解放伝統、トライブ(P.Trible)は聖書に家父長的要素と非家父長的要素の二つがあると主張した。その他の女性解放神学は次を参照。

Elizabeth Cady Santon and Revising Committee, The Women's Bible (San Francisco : Harper & Row,

1988);

韓国女性神学会,『聖書と女性神学』(ソウル: 大韓キリスト教書会,1997),9-14.;

チョン・ヒョンキョウ,“女性神学の類型とその韓国的受容および批判Ⅱ”,『キリスト教思想』

11 (1989):147.; Katie Geneva Cannon, “The Emergence of Blac Feminist Consciousness”, *Feminist Interpertation of the bible*, ed. L. M. Russell, *Hosehold of Freedom : Authority in Feminist Theology* (Philadelphia : The Westminster Press, 1987), 30-33.;

E. S. ピオレンジャ,『石でなくパンを』キム・ユンオク訳 (ソウル: 大韓キリスト教書会, 1994),19-25.;

R.R.ルーサー,『新しい女性・新世界: 性差別主義と人間の解放』, ソン・スンヒ訳 (ソウル: 現代思想社,1980),41-56.

68. モルトマンのこのような解釈は彼の循環論的三位一体の基本思想に従うものである。

ユルゲン・モルトマン,『三位一体と神の国』, キム・キュンジン訳 (ソウル: 大韓キリスト教出版社,2004),272-273.

69. 今まで男女の気質と役割の差異は男性優越論者によって身分的秩序の差異の根拠として悪用されたし、女権運動家らはこのような理論に過敏な態度を見せ、男性を模倣して同じ役割を遂行することで対等な地位を確保しようとした。しかし統一神学では男性と女性の差異は神に喜びを返すための刺激であり、神の各一性を担当するという点で価値あるものである。 世界平和統一家庭連合,『平和経』, 970.

70. 世界平和統一家庭連合,『原理講論』, 133.

71. “真の愛の完成であるが、完成には二人がいるのです。主体と対象があるというのです。こ のような二つの概念があるということを知らなければなりません。”『み言葉選集』第304巻, 1999.09.05.

72. 愛は必ず相体関係を結んで授受作用をしてこそ完成することができる。“神は全知全能な方だから望むままにみな成すことができ、したいままに全てできます。そのために神が必要とするものは何もありません。ただ一つ愛だけが必要です。いかに神が絶対者だとしても、一人では愛を所有することができません。愛は必ず相対的関係においてのみ見つけられるものであるために、神がいくら全知全能な方であっても、愛だけは神お一人では所有できないというのです。もちろん愛の素性を持ってはいるが、愛の刺激と愛の信号は相体を通してのみ再現されるのであって、自体だけでは顕現することができません。これが愛です。愛の力なのです。” 世界平和統一家庭連合,『天聖経』, 1-2-2-1,66-67.

73. “真の生命と真の愛、そして真の血統の根源である神が共に居られ、神が永遠の価値の祝福を下さった真の父母が皆さんを導いておられるのです。”

世界平和統一家庭連合,『平和神経』, 271.

74. “神は絶対平和モデル理想家庭を成そうとアダムとエバを創造し、彼らを人類の初めての先祖として立てました。ご自身のすべてを完全投入されて真の愛と真の生命と真の血統が連結した天宙の総合実体であり、霊界・肉界の媒介体であり、万物の主管主たる息子・娘として立てられたというのです。”世界平和統一家庭連合,『平和神経』, 209.

参考文献

文鮮明.『原理原本』第 1 冊. プサン: 筆写本,1951.

文鮮明先生み言葉編纂委員会. 『文鮮明先生み言葉選集』第 9 冊,第 20 冊,第 41 冊,
第 50 冊,第 54 冊,第 82 冊,第 159 冊,第 304 冊,第 327 冊. ソウル: 成和出版社,1983- 2010.

キム・ハンジェ.『統一教義学研究Ⅲ』. アサン: 鮮文大学校出版部,2006.

世界平和統一家庭連合.『原理講論』. ソウル: 成和出版社,2014.

_____.『平和神経』. ソウル: 成和出版社, 2009.

_____.『平和経』.
ソウル: 成和出版社, 2013.

_____.『天聖経』. ソウル: 成和出版社,2013.

シム・グァンソプ.『共感と対話の神学—フリードリヒ・シューライホマホ』. ソウル: 信仰と知性社, 2015.

統一思想研究院.『統一思想要綱 (頭翼思想)』. ソウル: 成和出版社,1993.; 2001.

ダニエル B. クルレデニン編.『東方正教会神学』. チュ・スンミン訳. ソウル: ウンソン,1997.

レルフ・スミス.『旧約新訳』. パク・ムンジェ訳 コ・ヤン:クリスチャン・ダイジェスト,2009.

レオナルド ボブ.『三位一体共同体』. キム・ヨンソン,キム・オクチュ共訳. ソウル:
クリスチャン・ヘラルド, 2011.

Robert L. Reymond.『最新組織神学』. ナ・ヨンファ, ソン・ジュチョル, アン・ミョンジュン,
チョ・ヨンチョン共訳. ソウル: キリスト教文書宣教会, 2004.

R. R. リュ.『新しい女性と新世界:性差別主義と人間の解放』. ソン・スンヒ訳. ソウル:
現代思想社,1980.

ウィリアム・ラルフ・インエ. 『ロゴス・キリスト論とキリスト教神秘主義』. アン・ソグン訳.
ソウル: ヌメン社, 2009.

Barth, Karl. Church DogmaticsⅢ.trans. Geoffrey William Bromiley. Edinburgh:T.& T.
Clark, 1977.

G. E. レッド.『新訳神学』. イ・ハンス, シン・ソンジョン訳. ソウル: 大韓キリスト教出版社, 2003. Galot, Jean. *Who Is Christ?:* A Theology of the Incarnation. Chicago ,IL: Franciscan Herald
Press,1981.

Jewett, Paul King. Man as Male and Female: A Study in Sexual Relationships from a
Theological Point of View. Grand Rapids: Eerdmans, 1975.

Kelly, J. N. D. Early Christian Doctrines. 4th ed. London: Black, 1968.

Moltmann, Jurgen. The Trinity and the Kingdom: The Doctrine of God. New York:

Harper & Row, 1981;『三位一体と神の国』. キム・ハンジェ訳. ソウル: 大韓キリスト教出版社, 2004.

Shymmyo, Theodore T. "Unification Christology: A Fulfillment of Niceno-Chalcedonian Orthodoxy," 17-36. in edited by Theodore T. Shymmyo and David A. Carlson. *Explorations in Unificationism.* New York: HSA-UWC, 1997.

Zizioulas, Jean. *Being as Communion: Studies in Personhood and the Church,* Crestwood, N.Y.: St. Vladimir's Seminary Press, 1985.; 『親交としての存在』. イ・ソンヒョン＆ジョング・エソン訳. チュンチョン: サムウォン社, 2012.